

観察者と被観察者との間

—面接におけるラポールの問題—

井 垣 章 二

社会学、心理学、文化人類学などにおける数々のすぐれた業績は、面接によるデータの上につきあげられたと云うことが出来る。また今日、諸科学の総合的アタックが向けられている人間関係、産業関係、そしてマス・コミュニケーションの研究にせよ、すべて面接のデータを用いており、更に公私の各種統計資料にしても究極的には面接に頼っていることを悟らざるを得ないのである。

云うまでもなくこのことは、面接の科学における広汎な利用範囲とその重大な役割を示すものである。しかしその最も重要な意味は、そのような貴重なデータの一つ一つが、結局、面接という一つの独自の人間関係的情况乃至は社会的相互作用に基づいて蒐集されているという事実である。データの蒐集が人間の相互作用の過程を通じて行われるというこの直接の結びつきは、後者の前者に及ぼす影響の重大性を暗示するものと考えられる。観察する者の存在が、観察される者によってある様式において知覚されるとき、真実の測定を大きく誤らす重大な影響を与えることは久しく認められてきた。測定しようとするものの真実の測定、即ち正確なデータの獲得を究極の目標とする社会調査にとって、測定

情況に重大な作用を及ぼすこうした観察者の存在の問題は、克服しなければならない一つの障壁を形成している。この問題の解決は、明かに、社会調査における面接という一つの独自の相互作用の性質を理解することから始められねばならないであろう。そのためには、この相互作用の担い手である観察する者とされる者、またはより端的には、面接者と回答者とのそれぞれの立場が関連的に明かにされることが必要であり、ことに面接者の回答者に対する立場、乃至はあり方について入念な分析が必要である。

ところで、このような問題を論じるにあたって、見逃すことの出来ない一つの重要な概念——ラポール (rapport)——がある。しかしながら、この「ラポール」というものも、「通俗的には、「よき関係」「信頼関係」「友好、親密な関係」「心と心のつながり」等々と簡単に理解されているだけであって、その担う役割の重大性を叫ばれながらも、一方、その意味するところは決して明確とは云えない。ここに、W. J. Goode & P. K. Hatt もその語の曖昧さを指摘するが、しかし「ラポールの状態とは、回答者が面接者の調査目的を受容れ、必要な情報の獲得を積極的に援助する場合に、面接者と回答者との間に存在する」ものであって、「この成果を獲得する最上の方法は、通常、あたたかく同情的なアプローチである」と述べ、その意味するところはむしろ明白だと云う。⁽¹⁾ その規定はともかくとして、社会調査においては、調査者は回答者と呼ばれる自分とはほとんど何のかかわりもない他人から、何らかの手段を講じて正確な報告を獲得しなければならないわけであって、究極的には回答者の協力を示すこの「ラポール」こそ、その中の本質的な手段であることは容易に理解出来るのである。ことに、かなりの時間と回答者の側の労力を必要とする詳細綿密な報告の獲得を目指す集中的な面接では、何よりもこのラポールは必須欠くべからざるものであると云わなくてはならない。⁽²⁾ もち論、ラポールの必要性はこのような特別な場合に限るものではない。R. K. Merton の指摘する⁽³⁾ ように、「回答者とのラポールがフィールド・ワークの凡ゆる局面において必要」なことは「常識」と云ってよいし、また面接の技術が論じられる場合、このラポールがその第一の課題とされているのはむしろ周知の事実である。

かくて、このことから、ラポールは面接に必須欠くべからざるものであり、面接者はまず何よりも回答者との間にラポールを、しかも出来る限り高度のラポールをうちたてるべきだという主張に達するのは、むしろ当然と云えよう。しかしこれには、ラポール大なればなる程、多くのしかも正確な情報が得られるという一つの前提が必要である。前述の Goode & Hart の場合では、その「必要な情報」は、間違いなく、事実と一致した正確な報告を意味するものでなく、はならないわけである。もしそれが真実なら、ラポールの達成即妥当なデータの獲得に他ならないことになり、かくて面接調査の全目的は、「ラポール」というこのただ一つの言葉で示されることになるであろう。この場合、ラポールは単に不可欠と云うばかりではなく、まさに万能とも云わなくてはならない。そしてこれは明かに、ラポールについての伝統的な考え方だったのである。

しかし果してその通りであろうか。後述するように S. M. Miller や H. H. Hyman などのこれに対する回答は、決して肯定的なものではなかった。即ち、このラポールがかえって調査の進行を妨げたり、真実の回答を歪めたりする場合のあることを彼等は発見するに至ったのである。⁽⁴⁾しかし、にもかかわらず彼等にとっても、ラポールは調査に必要なものには違いなかった。この一見矛盾するように見える見解は、今ここでは立入って検討しないが、ラポールというものの一層の明晰化を通じて解明されるはずのものである。

とにかく、われわれは社会的相互作用としての面接を問題にしている以上、その極わめて重要な概念である「ラポール」を看過することは出来ない。したがって、この小論にはラポールについての検討が当然含まれることになるわけである。しかし、いずれにしても、われわれの第一の課題は、面接を面接者と回答者との相互作用として分析し、両者の関係が如何なるものであるかを追求することにあるのである。どのようにして面接が受容られ、正確な報告が引き出されるのであるか。ラポールはどうして必要なものであり、またどのように形成され、更にその正しい位置づけはどのようにになされるのであるか。すべてこのような問題にしても、調査という目的のために、いわば一時的に接触交渉する面

接者と回答者とのそれぞれの立場、あり方を刻明に分析してこそ、始めて明かにされるものと考えられるからである。

(1) W. J. Goode & P. K. Hatt, "Methods in Social Research" 1952, p. 190.

(2) 例えは P. F. Lazarsfeld は「最近次第で用いられるようになった「反覆面接による変化の測定を企図するパネル調査」において、ラポールの重要性を強調してゐる」("The Panel Study" in "Research Methods in Social Relations" part two, p. 608.)

N. Gross & W. S. Mason は「特筆すべき研究では、' 連々八時間たて及び面接をめぐり、疲労はラポールに於て克服されること' が明かにされてゐる」("Some Methodological Problems of Eight-Hour Interviews" in "American Journal of Sociology" 1953, Nov., pp. 304-12.) 更に R. K. Merton は「ある調査結果の分析を通じて、' 定性的データの大部分が、結局、高度なラポールをもつた回答者から引出されてゐることを明かにしてゐる」("Selected Problems of Field Work in The Planned Community" in "American Sociological Review" 1947, June, pp. 304-12.)° これらは最近のほんの少数の事例である。その他、無数に面接が反覆される精神分析学者の行うような治療的面接では、ラポールの重要性は云うに及ばなう。

(3) R. K. Merton, "Selected Problems of Field Work in the Planned Community" in "American Sociological Review" 1947, June, p. 306.

(4) 第五章参照。

二

まず、簡単な面接の規定を試みると、T. Caplow の云うように「明確なプログラムにより、その参加者の一人によつて導かれる二人の会話」⁽¹⁾ ということにならう。もとより面接というものは、社会調査の独占物ではない。受験における選考、報道のための取材、司法における証言取調やその他、種々な内容目的のために色々な職業領域で用いられている。社会調査において面接は、調査にとりあげられた研究問題の解明のためのデータを獲得することを目的として、調査者が明確なプランをもつて行ひ会話ということが出来る。

社会調査における面接の看過することの出来ない重要な側面は、すでに指摘されたように、面接者による質問と被面

接者による回答による、社会的相互作用を通じてデータが蒐集されるという事実である。ここに、面接情況というものは、面接者と回答者とのそれぞれのパーソナリティ特性や、それにさまざまな情況的要因が加わって、まさに多様極わまりなく、それぞれがユニークだとも云えよう。しかし、見ず知らずの他人がある事がある事について回答者に質問し回答を求めるという、共通な基本的側面が注目せられる。云いかえれば、面接とは本来コミュニケーションが行われない人と人との間のコミュニケーションなのである。ところで、その会話が回答者の行動を改良せんがために行われる所謂“therapeutic interview”においては、彼は依頼者(client)であり、申請者(applicant)である。この場合、たとえ彼がその面接を自発的に求めないにしても、究極的には、彼はそれから何らかの利益を受けるはずのものである。しかしここで論じられるような、社会調査における“information interview”では、回答者は多くの場合自ら面接を望んだものではないし、また本来何らかの直接的な利益が期待出来るものでもないのである。

さて、面接調査では、このような回答者がまず面接を受けることを承諾するようにしなければならぬ。しかしこれは案ずるほど現実には困難な仕事でもないようである。まずこのことは、充分計画された普通の調査では、拒否率はむしろ無視してもよい程のものであるという事実によって、客観的に明かにされている。ちなみに、アメリカではこれが五パーセントを越えることはまずないと云われている⁽²⁾、またその方面のデータは提出出来ないが、わが国の場合でも多分それと大きな隔りはないものと思われる。このように面接を求められた人々の殆どがそれを承諾することになるわけであるが、この理由を少し分析してみると、恐らくそれは面接に似た情況が日常生活において充分経験されていることにもよるからであろう。これについて前述の Caplow は次のように述べている。非常に満足な会話の状態というものは、相互の意志が完全に疎通し合え、相手の云うものの内容や組織を予測し限りなく話題を發展させて行く progressive adjustment の可能な場合である。しかしこれはただ最もインテリメータな間柄においてのみ期待出来るものであって、インテリメートの範囲を越えるにつれて、ますます困難になって行く。しかもわれわれは少ししか知っていない人や全

く見知らない人と接触し、会話の必要に迫られている。だからわれわれは至るところ不満足な退屈な、または混乱した会話を続行せざるを得ないわけであって、そのような会話に対する一種の寛容と、少しぐらいのフラストレーションがあっても、その会話を続行する意志とをわれわれは発展させているのである。このようにして、われわれの社会が形成発展させてきた会話に対する期待や態度の中に、面接調査の受容れ体制と云えるものが自ら備わっていると云うことが出来るのである⁽³⁾。

とにかく、殆どの人々は積極的にせよ消極的にせよ、面接を続行しようとするであろう。しかし、この場合重要なのは、面接への参与の動機である。もち論、面接者の方は調査という目的のためである。しかし回答者の側からすれば、必ずしもそれに一致した目的をもつわけのものではないのであって、そのうえ、人によって色々と異なるものと考えられる。回答者の参与の動機は、R. K. Merton も指摘するように、回答の妥当性の問題にも連らなっており、ここに数少いこの方面の研究の中から、この Merton の *メソ*、C. F. Cannell & M. Axelrod の行ったものとをあげて考察してみることしよう。

まず Merton は住宅計画による小さな労働者街 Chalfown の調査において、とくにそのために設計された方法によって、回答者は面接をどのように体験したかを報告している。その主なものは、(一)意見表明のための民主的チャネルとして(世論を明かにしてよりよき政策をたてるために)(二)知識を必要とする経験として(むつかしくて自分は答えられないのではないかと思う)(三)道徳調査として(自分は正しい生活をしているから、私の云ったことを誰が知ろうとかまわない)(四)社会調査を今日の社会における制度の一部として(自分が面接されても当然なこと、とりたてて云う程のことではない)(五)自分を意味ある重要なものとして(問題について自分は相談をうけた)(六)憤懣のはげ口として(言ってしまったですつとした、そんなことを云う機会が来るとは思わなかった)などというものである。⁽⁴⁾これは面接情況が如何に主観的には異っているか、即ち一つの調査はその目的が何であれ、さまざまな解釈をうけるものであるこ

とを暗示している。

更に面接は、満足不満足という点で回答者にどう感じとられたであろうか。ホームルな面接調査が終つて調査票や鉛筆をしまった後、話をするふうに、「面接は終りました率直に御意見をおうかがいしたいのですが……今ずっと面接されている間、本当のところどう感じましたか」と質問することによって、回答者のセルフ・レイティングが求められた。この結果、三分の一が深く関心をもつたものとレイトされ、三分の二たらずがやや関心をもち、明かな敵意を表明したものは三パーセントに過ぎなかったことが示されたのである。⁽⁵⁾

ここで二つの重要な面接調査、F. J. Roethlisberger & W. J. Dickson による労働者の志気に関する The Western Electric Study と A. C. Kinsey による性行動に関する The Indiana Studies を挿入しておくのが適當であろう。

このいずれも面接志望者が蒐られたのであるが、前者においては、別に自分には直接何の利益にもならない面接に、労働者たちが示したその熱意に調査員たちはいたく驚ろかされたのであった。感づいた理由をこじつけて、その時間だけでも仕事を休めるといった、あるいは自分たちの労働環境の改善に何か役立てようという動機があったからだと言えよう。しかし Kinsey の研究においては、どう考えても参与することに何の利益も認められないにもかかわらず、しかも異常な性行動という非常にプライベートな問題をとりあげていながら、十万の志望者を目ざしてすでに二万名が登録されたという。そして感情の吐露や治療を求めているという根拠も全く認められなかったのである。⁽⁶⁾

これは面接を受けた人が、かなり存在していることを示すものではあるが、もち論、すべての人々がみんなそんなのではない。社会調査は、通常、望むと望まないにかかわらずあらゆる種類の人々に面接を要求するたて前のものであって、かかる場合こそ問題としなければならぬものである。Merton の研究はこれを取扱かっているが、それもある特定の小さなコミュニティに限ったものであった。それでは更に多様な回答者を含む大規模な調査において、このことはどうであろうか。

これについて、Cannell & Axelrod は「質問紙や再接の方法により、面接が楽しい有益な経験であったかどうかを、主題を異にする四つの調査で研究した。即ち、「その面接にどんなに興味をもったか」という質問では、この四調査の回答者の大多数が「非常に」または「かなり」興味をもったと云い、このいささか社交的辭礼によつて動機づけられやすい質問ではなく、「もう一度面接されたいと思うか」というより中立的な質問に対しても、四分の三が肯定的回答をあたえたことを彼等は明かにしている。そしてここで注目すべきことは、その調査の意義についての質問では、回答者は面接又は調査の内容よりも、個人としての面接員や彼のやり方、振舞い方にむしろ関心を集中する傾向が明かにされたことである。そして彼等は、個人的に過ぎると回答者に批評された質問に対してすら回答者が報告をよせたことは、面接員との楽しい個人的関係を維持するためであったと解釈し、それ故にこそ、回答者によい印象をあたえるような面接員の選定と訓練とは何よりも重要だと云う。そして、彼等もまた、「面接員が回答者に成功的にうちたてた関係は、回答者から供給される情報の正確さを大きく規定する」という見解に到達するのである。たとえ彼等のこの主張が全面的に受容れられないと仮定しても、とにかく面接調査においては、面接員と回答者との人間関係的情况がデータ蒐集過程における重要な要因であることはここに断言出来るのである。

- (1) T. Caplow, "The Dynamics of Information Interviewing" in "American Journal of Sociology" 1956, Sept., p. 165.
- (2) C. F. Cannell & M. Axelrod, "The Respondent Reports on the Interview" in "American Journal of Sociology" 1956, Sept., p. 177.
- (3) Caplow, op. cit., p. 170.
- (4) Merton, op. cit., p. 310.
- (5) *ibid.*, p. 307.
- (6) Caplow, op. cit., p. 168. なお前者、即ち The Western Electric Study の場合では、調査者は、被面接者のかような熱意の

理由は、彼等が感情を吐露し何か治療といふやうなものを求めたと云ふにあるのかも知れないと暗示してゐる。(Ibid.)

- (7) Cannell & Axelrod, pp. 177-81.
(8) *ibid.*, 177.

三

以上見たように、殆どの人々が面接を拒否しないばかりか、むしろそれを満足な体験としていることは、社会調査が究極的に対象者に依存しなければならない以上、その発展に明るい見透しを与えるものと云える。さて、ここで重要なことは、面接に対する回答者のこのような満足な肯定的な感情は、行われている調査そのものではなく、その担い手としての面接者との人間関係的情况に、むしろ付帯するということである。以下この点についてしばらく分析してみよう。

とにかく、質問と応答によるデータ蒐集の現実の場面では、社会調査は面接者と回答者との相互作用の平面に移される。調査という目的のための人為的且つ一時的なこの相互作用は、すでに指摘されたように、面接者の目的は調査にありながら、一方、回答者にとってはそれはむしろかわり知るところでないという、各々参与の目的を異にし相互にストレンジャーである二人の参与者または行為者を含む点に特質を有している。故に、社会調査の実施段階におけるこの焦点、即ち面接にまつわる問題は、まず相互作用のこの二人の参与者の分析から始めなければならない。

まず、面接者は面接情況においては調査の実施者として現われ、面接者として果すべき規定された役割を有している。しかし面接情況を離れて、日常の社会生活の場面では、彼は特定の集団や階層に所属しそれに位置づけられた、また別の役割を有している。即ち、面接者はただ単に面接者として存在しているのではなく、たとえば彼は面接者であると共に官庁の役人であったり、大学の先生や学生であったり、またはある機関の成員であったりするわけである。世論調査等の機関に所属する専任の面接員は別として、彼の日常生活における中心はむしろ面接や調査とは別個の世界にあ

ると云うことが出来よう。端的に云えば、面接者が面接を行っているのではなく、ある場合には役人が、あるいは大学教授が面接を行っているのである。もち論、面接者の役割はその調査を統轄する機関や委員会が、あるいは、更に抽象的には、面接の技術というものが明確に規定し厳然と存すべきはずのものかも知れない。しかし M. Benney & E. C. Hughes も指摘するように、面接者の役割は専任の面接員にとつてすら比較的軽く取扱われ、また事情によっては他の役割のために放棄されるようなものである。簡単な例で云えば、一面接員が対象者の一人として自分の親に面接しなければならぬ場合、もし彼が面接員という役割と子という役割が闘争する場面に直面するなら、前者を放棄してしまうことが考えられる。⁽¹⁾ また別の例で云えば、年長者がすぐれて權威を有する社会では、年少の面接員は面接員としての役割を放棄し単に年少者として年長者に対するが如きである。

しかしとにかく、面接者の方は面接という相互作用への参与の役割もむしろ明確だと云つてよい。しかしこれに反して、回答者の方はこれとかなり事情が異っている。即ち回答者の方にはありとあらゆる背景の人々を含むばかりでなく、すでに述べたようにさまざまな動機をもって面接にのぞむことが出来る。それに面接者の役割に対する回答者の役割というものは明確ではないのである。⁽²⁾ かくて回答者の立場は、突如自分のもとに訪れ、ときには立入った質問まで行って回答を求める面接者をめぐって、どのような情況規定を行い得るかということから分析しなければならぬであろう。換言すれば、面接者を何者と知覚するかによつて彼の立場は定まるのである。回答者が対応する面接者はただ単に面接者としてでも、また無色透明の他人としてでもないであろう。第一、回答者の前に立ちはだかる面接者は、ある特定の行動様式、顔つき、服装に色どられた具体的な個人である。⁽³⁾ 回答者にとつては、調査という特殊な活動を行っている人間であることと、この個人的な特徴が結び合つて目前の面接者が何者であるか、つまりどのような背景を有するものであるかについて何らかの具体的なイメージをつくりあげるのである。もとよりそれには、行われる調査の内容やその調査の主催者の如何が、回答者にとつては、このための大きな手掛りとなることは云うまでもない。

ところで、面接をこのように相互作用として分析を行っている理由は、それが測定過程に影響し、回答をゆがめる作用をはたらくからである。しかしながら、面接者がその役割に忠実であり他の社会的役割に逃避しないことを条件としたうえで、ここに回答者が彼を役人として知覚したとしても、それだけでは測定過程を左右する影響はまだ現われないであろう。それが現実には作用をもつのは、回答者に知覚された面接者が所属していると考える集団が、回答者にどのような種類のものとして感じられ、またはどのような意味が与えられているかに依存していると云える⁽⁴⁾。たとえば I. A. Dexter は、通商に関するある調査において、保護貿易論者たちは、一般に学者というものを自由貿易と国際主義とを擁護する立場にあるものと見做す故に、大学教授である面接者もかような意味において考えられたところから、如何に説明しても、研究のための事実を求めるのみだという中立性は損われざるを得なかったことを述べている。即ちある者は自分の主張を説得することに全力を向け、ある者は社交的辭礼として衝突を回避しようとするところから、余り主張をしないでおくか、それとも、面接者の立場と考えるものに実際以上に一致しようとしたのであった⁽⁵⁾。これは回答者が面接者を自分と対立するものとして受容れ、自分の本来のものを抑止し、その面接者が保持しているに相違ないと考えられるものに応じた立場や見解を装おうとする傾向のあることを示すものである。こうした問題については、なお、次に示すように色々の調査研究がなされている。

一例として、一九四二年 NORC が行った一千名の黒人を対象とする白人黒人二種類の面接員による比較研究をあげてみよう。その結果、意見や態度に関する質問はもち論のこと、事実に関する質問項目にすら、両者の間に差異が見出されることが明かにされたのであった。即ち黒人たちは、彼等が蒙っているさまざまな差別についての憤懣を、黒人面接員に対してよりもはるかに白人面接員には表わそうとしなかったし、自動車をもっているか、黒人新聞を購読しているか、CIO に加入しているかというような事実に関する報告にも差異が見られたのであった⁽⁶⁾。

このような問題は、白人対黒人のような鋭い対照を描くエンカウンターに限らない。D. Katz は、この点に関して、

回答者は凡ゆる階層から引き出され得るが、面接員の殆どがホワイト・カラー・ミッドウル・クラスの成員である点に注目し、その階級の差異が回答者にどう影響するかを見究めようとした。とくにこの実験のために雇われて訓練をうけた十一名の工場労働者を面接員とするグループと、九名の中層階級出身の面接員のグループとによって行われた、ピッツバーグにおける低所得階層地域の面接調査において、彼は、労働問題に関して前者は後者よりもラディカルな報告を一層引き出したことを明かにしている。そして更に彼は、このような現象から、あるいは一九四八年の大統領選挙予想における民主党の過少推定が明かに出来るかも知れないとも暗示するのである。⁽⁷⁾これについては Hyman も Crossley 及び Roper Polls における黒人である回答者の殆どが白人によって、しかもその三分の二までが大学教育をうけた白人によって面接されたところから、「選挙予想調査に面接員の構成が誤差を生ずることは誰も確かめ得ないが、下層階級及び黒人の回答者は、この点あまり信頼的に話さなかつたようなのはありそうなことである。上層階級の面接員の究極的支配は、世論調査がどうして共和党バイアスを示したかの一つの理由であり得る⁽⁸⁾」と述べている。

さて、Katz の得た前記の調査結果は彼自身によって次の如く解釈されている。即ち回答者たちは自分と同じ階級に属する下層階級の面接員に対しては自分（下層階級）の立場をコミュニケーションするが、自分とは異なる中層階級の面接員に対してはそれをコミュニケーションするのを抑止する傾向にあつたからであり、回答者は自分と同じグループ・メンバーシップに属する者にはスムーズに言葉を交わせること、即ちよりよきラポールの故であると考えるのである。⁽⁹⁾

もとより、これにはただ回答者の側からのみの作用だけにとどまらず、Hyman がつとめて強調する面接員からの作用、即ち面接員のバイアスを考慮に入れなければならないのであろう。質問と記録とによってその面接の主導権を握る面接員こそ、恐らく測定情況により以上の大きな作用を営むものであろう。更に、同じく彼がある調査研究によって明かしたように、グループ・メンバーシップの類似性とラポールとは必ずしも相互に関連しないものであり、両者は面接情況に作用する分離した要因であることも考え合せなければならないであらう。⁽¹⁰⁾しかしグループ・メンバーシップの

類似性は、その大差を有する場合よりも、ラポール形成を一層容易ならしめる傾向があると云うことは出来る。(11) つま
りわれわれは一応 Katz の主張を支持してさしつかえないのである。Hyman 自身もそれは認めているところであり、
面接者と回答者の間の社会的懸隔の克服は、かくて、ラポール形成の少くとも一つの要件を確立するものと断言出来よ
う。すべて面接の技術といい、質問作成の技術といい、仮想的にせよ回答者のグループの側に近づくことによって、観
察者と被観察者とのひらきを克服せんとする努力をめぐって展開されて来たと云える。例えば Kinsey は、面接におけ
る言葉使いには方言等対象者の日常なれ親しみ且つ用いている種類のものを使用し、相手に面接者が彼等自身の立場に
あることを感じとらせることによって、面接者は普通では打明けられないような報告をも獲得し得ることを強調してい
る。(12) 一方、前述の Katz は、対象者と同様の階級に属する面接員を割当てることによって、これを試みたわけである。
そしてこの考えが更に押し進められるとき、遂には調査者そのものの立場が対象者のグループの側に移転されることに
もなる。次に述べる参与的観察法 (participant observation method) がそれであって、われわれはこの独自の調査方
法を検討することによって、調査目的の遂行に必要なラポールとグループ・メンバーシップとの問題を、一層明かにす
ることが出来るであらう。

- (11) M. Benney & E. C. Hughes, "Of Sociology and the Interview" in "American Journal of Sociology" 1956, Sept., pp.
138-39. 専任の面接員としたところで、抽象的に考えられる「面接員役割」以外に何もものもないというわけにはゆかない。むしろ面
接員という特殊な職業は、ある特定の社会的階層に所属するものと考えてよい。これについて P. B. Sheatsley が、Gallup, Roper,
NORC, Bennett, BAE 等の現スタッフが、七四%が女性で、七八%が少くとも大学教育を受けており、九八%が白人によって占
められてゐることを指摘し、「市場調査や世論調査の面接の大部分が、女性が男性に、大学卒業者が教育程度の低い者に、中の上
の階級の者が低い社会的経済的地位の者に、白人が黒人に、都市在住者が農村の人々に、話しかけられることによって導かれざる
を得ない」ことから、調査結果に含まれ得べきバイアスの可能性について警告していることは注目値しよ。 (H. H. Hyman,
"Interviewing in Social Research" 1955, p. 151.)

観察者と被観察者との間

- (2) Banney & Hughes もこのことを指摘するが、“respondent role”を好むる準備的社會化と云ふものが、学校、職場に於て、またマス・メディアを通じて行われており、ますます「有能な回答者」(potential respondent)が現われていゝものと云ふ。調査というものがより普ねく人々に理解されているアメリカ等において云えることである。(op. cit., p. 139.)
- (3) 面接の技術は、下層の人々を刺激しなうように余り目立った服装や風采を装わなうことを教へつゝゐる。(P. B. Sheatsley, “The Art of Interview and a Guide to Interviewer Selection & Training” in “Research Methods in Social Relations” p. 474)
- (4) これについて、政府からだといふものと大学からだといふものとの二種類の面接員における調査では、その結果の差異は、政府が国民に対して広汎な統制力をもつ時期ともたない時期によつて、顯著になったり、または無視出来る程度にとどまつたりするであらう。(Hyman, op. cit., pp. 186-87.) 何れによらず、その調査の主権者は誰であるかということが、最も重要な影響を与へるのみか知らなう。面接員は、その手先を過ぎなうとも云へるのである。
- (5) L. A. Dexter, “Role Relationships and Conceptions of Neutrality in Interviewing” in “American Journal of Sociology,” 1956, Sept., pp. 53-54.
- (6) Hyman, op. cit., p. 159.
- (7) *ibid.*, p. 167-68.
- (8) *ibid.*, p. 153.
- (9) *ibid.*, p. 168.
- (10) *ibid.*, p. 158.
- (11) *ibid.*, p. 153.
- (12) Dexter, op. cit., p. 155.

四

以上、調査者と対象者との所属集団または階層における懸隔はラポールの形成を妨げる傾向を有することが指摘された。この問題は、ある社会的特徴の明確な範囲をもち、人々が相互に密接に関連し合つてゐるスモール・コミュニティ

や組織体などが調査対象とされるとき、とりわけクローズ・アップされなければならないものである。即ち、その場合では、対象者が特定の共通な特徴を有するまことにすることによって、調査者をそれとは全く異った顕著な存在、所謂アウトサイダーたらしめ、両者の間の著しいコントラストは、調査のスムーズな運行を可能ならしめるラポールの形成を明かに妨げることとなるからである。しかも対象者が相互の連絡もなく広大な地域に分散されている場合と異って、こうした閉ざされた社会においては、Merton も指摘するように、たとえ一人の対象者に起させた敵意ですら、その親しい関係の網を通じて直ちに全体に伝播されることを考えなければならぬ以上、人々とのよきラポールは調査の完遂に欠くことの出来ない必須の要件としなければならないのである。⁽¹⁾

ここに、面接者と回答者との顕著なひらきは何らかの方法で克服されなければならないことになる。かくて、調査者は、対象とする集団そのものの一員となり、その人々と生活を共にし対象者そのものの側に立とうとする。かつて、C. Booth は、そのロンドン東部地帯の貧困調査において、貧しい労働者家族の下宿人として生活を共にしながら観察を行った。また Nels Anderson は、彼の研究対象とした浮浪者に全く切り切った生活を行い、“Middle-town” においては、Lynd たちはその土地への義務と忠誠とを誓う文字通りの市民であった。更に W. F. Whyte は、そのイタリアン・スラムの研究では、コーナーウィルの一ギャングであった。「事情の許す限り生活活動、また時としては、一団の人々の関心や感情を意識的体系的に分ち合う」⁽²⁾ 参与的観察と呼ばれるこの方法は、グループ・メンバーシップの懸隔を克服し、対象者とのラポール形成の途を開くことを目指して考案されたものと云えよう。

次にわれわれは、この参与的観察とはどのようにして行われ、そのもつ如何なる意味の故に、ラポール形成と調査の促進に役立つかを、ニューメキシコにおけるスペイン人系部落における F. Kluckhohn の場合を例示しながら考察してみよう。

彼女によれば、参与者となることは、その社会自身の役割体系の何処かに自己を位置づけることを意味する。即ち調

調査者は調査者としての役割でなく、その社会に通用している役割に自己を位置づけなければならぬのである。というのは、調査者は自分を参与者と意識するだけでなく、むしろ、相手が参与者と感じることが何よりも必要だからである。さて、その村のある商人の友人であり、夫は隣の地域で働いているのだという名目でそのコミュニティにのりこんだ彼女は、男たちが牧業などに出かけており、とどまって家の面倒をみることになっているその地の女達と全く相似た立場におかれているのに気付いた。即ち、その地の夫、主婦の役割という点では何ら異なるところがなかったわけである。このようにして彼女は女達と同じ役割を演じることによって、「家々に近づき非常に自然なやり方でつきつきと女たちと話しをすることが出来た」のであった。そして土着の食物の作り方、床のつくろい方のようなことから、ダンスでの身の振舞い方、男への接し方等々調査すべきことがらを自然な形で話させることが出来たのである。それは彼女がそこで生活しており、生活するために必要なものとして教えられなくてはならないものであるから、質問は決して相手に不審の念をいだかせなかつたのである。⁽³⁾この点について、彼女は次のように主張する。相違点を見出そうとしているのだと相手に思われるよりも、相手と同じようになろうとしていられると思われていることの方が、はるかに情報を得やすい。参与的方法を用いない形式的な質問による面接は、特に調査のための特殊な情況をつくっているわけであり、調査者と回答者との隔りを余りにも赤裸々にすることにより、自然な相互作用を妨げる。だからその社会の一員を装い自然な過程の中で、即ち形式的な面接を会話に近づけることによって、より妥当なデータを得ることが出来ると云うのである。⁽⁴⁾即ち、本来アウトサイダーである調査者のかような「参与」はラポール形成の基礎的条件を準備するのである。

ラポールが調査に如何に重要であり、この「参与」ということがそれにどんなに役立つかは、コーナーヴィルにおける次の White の陳述にも見出されるであろう。「私は、間もなく、人々が私についての彼等自らの説明——私はコーナーヴィルについて本を書いている——を發展させているのを知った。それは全く余りにもほんやりし過ぎる説明ではあろう。でも、それでいいのだ。私とその地域で受容られることは、私が行うことの出来る如何なる説明よりも、私

がこれまで發展させてきたピースナル・リレーションシップに依存していることを私は知った。コーナーヴィルについて書物を書くことがよいかどうかは、私個人についての人々の世論に全く依存している。私がよければ私のやろうとすることもいいのだ。もし私がよくなければ、どんなに説明したところで、その書物が善意だと彼等に納得させることは出来なかつたであろう。⁽⁵⁾しかしその善意は、よきピースナル・リレーションシップは、どのようにして得られるのであるか。「恐らく、私の言葉（イタリア語）を学ぼうという努力は、私が私自身や私の仕事について、その人々に語り得た何ものにもまさって、私が彼等に関心をもっていることの真心を認めさせた。言葉を学ぶまでに至った調査者が、どうして彼の同胞を批判しようなどと企てるものか……」⁽⁶⁾ところで、彼の調査は専らコーナーヴィルの若い世代、即ち英語を話す人々に焦点がおかれていた。つまり彼のこの調査の目的のためにはイタリア語は必要なものでもなかつたのである。しかしながら彼のこの努力は、このコーナーヴィルにおいて——その若い世代の間には——彼の社会的位置をうちたてるのに大いに役立ったのであつた。これに関連して、未開社会における観察者の立場について述べた B. Paul の言葉が思ひうかべられる。即ち、土着のスキルを学ぼうとする人類学者の努力は、「馬鹿げているには違いないが、しかしもしその努力が好意と多少の謙遜とをもってなされれば、そのジュエスチエアは好感を促進する」ものである。⁽⁷⁾

このように「参与」は対象者の人々とのラポール形成に大きな途を開くのである。しかしながら、参与的観察のこの特質そのものに結びついてある限界が現われる。即ち参与する社会が二つあるいはそれ以上に分裂し、しかも相対抗している場合、参与を充分なものにすればする程、調査者はいずれか一方の集団に自己の位置を確定しないわけにはゆかず、かくて一集団への参与は、その故に、他の集団への接触をも妨げることにもなるからである。即ち、ラポールを樹立し成果が期待出来る範囲は、彼の参与する集団だけに限定されてしまふのである。

このことは、病院という同じく一つの閉された社会をとりあげた H. M. Trice の経験に明確にうかがうことが出来

る。彼はそのアルコール中毒患者の面接調査において、その病院の精神医から病舎の付随員に至る凡ゆるレベルの人々とラポールを結ぶ努力が、かえって調査の続行を不能ならしめる結果に立ち至った事情を次のように説明している。即ち Trice 等面接員は、「おれたちが気違いかどうかを調べるために大学からやって来た精神医の先生だ」と患者に思われてしまい、しかも、ここに収容されている他の患者と違って、自分たちは気違いではないという意識が強く、これに基づいて強い連帯性を形成していたアルコール中毒患者たちは、その一人によってなされた以上のような情況規定を直ちに採用普及せしめてしまったのであった。しかも、その病院の精神医たちはすべて彼等に嫌われていた。かくてここに、面接者はそれと同一視されてしまうことによって、患者の敵意に充ちた抵抗に逢着し、研究は殆ど放棄されねばならなかったのであった。この続行不能の調査は、しかしながら、調査者が医師やその他の職員たちとの接触を全く回避し名実ともはその病院に関係したのではないということを強調することによって航行可能となった。即ち、参与者ではなくアウトサイダーたることによって、調査者の立場に中立性があたえられ、対象者とのラポールがうちたてられたからである。⁽⁸⁾そして、彼によれば、このようにアウトサイダーとしてとどまることこそ「ラポール発展の金言」⁽⁹⁾なのである。

ところで、参与するのでなくアウトサイダーとしてとどまっても、ラポールの形成を妨げないという、否むしろその方がはるかに効果的だというこの事実は、一体何を意味するのであろうか。それはグループ・メンバーシップとラポールとのこれまで述べてきた議論を全く覆すものであろうか。否、それは共存しながら相反する集団への一方への参与又は特別な接触が他のものへの接触を如何に妨げるかということと、参与的観察と云わずすべての調査において、閉された社会における調査者の立場の問題が如何に鋭敏なものであるかを指示しているのに過ぎない。参与的観察といえど、かかる点を全く考慮せず無計画に行われるものでなく、その社会の特殊な事情にに応じて、参与の程度と方法とが決定されるに至るはずのものである。この点、参与的観察の賞揚者たち自身が、例えば前述の Kluckhohn や Whyte として、

参与者であると共にアウトサイダーの役割をも同時に保持せよと、等しく主張しているところに明白に認められる。⁽¹⁰⁾ 要するに、調査者がインサイダー役割を用いるにせよ、アウトサイダー役割をとるにせよ、如何なる場合にも究極の目的は調査にあり、出来るだけ多くのしかも正確な情報を得ることにあることを銘記しなければならない。参与にせよ反対に非参与にせよ、調査者の立場はすべて調査という目的の手段にしか過ぎない。Kluckhohn が見事に述べているように、「彼のすべての役割を tools に形作ることが調査者の仕事」なのである。また、ラポールにしてもこれと異なるところはない。それは目標ではなく、たとえそれに如何なる本質的重要性が与えられるにせよ、やはり一つの手段にしか過ぎないのである。それでは、手段であるこのラポールと目標である結果の妥当性との関係は、どのように位置づけなければいけぬか。

- (1) Merton, op. cit., p. 306.
- (2) F. Kluckhohn, "The Participant-Observer Technique in Small Communities" in "American Journal of Sociology" 1940, Sept., p. 133.
- (3) *ibid.*, pp. 334-35.
- (4) *ibid.*, p. 335, pp. 337-38.
- (5) W. F. Whyte, "Street Corner Society" 1954, p. 300.
- (6) *ibid.*, p. 296.
- (7) Dexter, op. cit., p. 157.
- (8) H. M. Trice, "Outsider's Role in Field Study" in "Sociology and Social Research" 1956, Sept.-Oct. pp. 27-32.
- (9) *ibid.*, p. 31.
- (10) 即ち Kluckhohn は、「調査者は、彼のアウトサイダー役割を完全にふり落すことは出来ないし、また私は、そうするのは勧められたものではないと主張する人々に賛成する」と云っている。(op. cit., p. 336.) また Whyte は、完全に、即ち凡ゆる面で被観察者と同じように振舞うことは、彼等の望むところではなく、被観察者はなお、その参与者のアウトサイダーたる点にも、同じく関心を寄せている事実を発見するに及んで、彼の本来企図していた "complete immersion" を放棄するのを賢明と悟るに

観察者と被観察者との間

観察者と被観察者との間

至った体験を告げている。(Op. cit., p. 304.)そして彼はまた、Triceと同様、分立対抗する集団のいずれについても成果があげられるように、アウトサイダーにとどまって中立性を保持する必要を説いている。(“Observational Field-Work Methods” in “Research Methods in Social Relations” Part two, p. 497.) 更に Merton の Crafovan における場合も、Trice のそれに類似したものである。即ち、その町には、一方には住宅管理者によって構成されているものと、他方には住民自体の間に構成されているものとの、二つの重要な権威体系が存在し、しかもこの二つは全く相離反していた。だから、もし調査員たちがこの町に入った当初、しげしげと管理者の事務所に通ったりすると、調査員たちは管理者の廻し者だと直に思いこまれてしまう。後になって弁明したところで、自分のこの目で証したことを信じようとする人々の確信はほとんど変えられない。しかし一方、管理者側を全く無視して調査を行えば、公式レコード等研究に必要なデータが得られないことになるだけでなく、第一、大いに管理者側の監督を受けている小さな閉されたコミュニティにおいて、調査を続行することは到底不可能でもある。ここに至って彼は、管理者と住民との二つのレベルに、同時的であるが独立したコンタクトを試みたのである。その結果回答者は、自分たちの発言が管理者側に伝わるという不安もなく、また自分たちとかわりをもたない、「アウトサイダー」であるということによって、腹藏のない意見を表明することが出来たのであった。(Merton, op. cit., pp. 304-6.)

アウトサイダーたる利点は、アウトサイダーなるそのものの故に、ある価値ある情報を獲得出来ることにもある。面接の技術は親しい友人に打ちあけるような情報を引き出す関係を、回答者との間にうちたてることを教えるが (Sheatsley, op. cit., p. 465) 確かにその通りではあるが、単純にそれだけにとどまるものでない。Merton の述べているように、偶然車中で向い合ったストレンジャー同志でも、これまで会ったことはなく、そして今後も再び会うことのない故に、かえって、非常にプライベートな打ちあけ話をすることはよく知られている (Op. cit., p. 305.)。即ち、親しい関係は必ずしも凡ゆるものをコミュニケーションするものとは限らないし、阻遠な関係が個人的内容をコミュニケーションしないものと単純には考えられない。

(II) Kluckhohn, p. 336.

五

これまでわれわれは、ラポールは面接調査において欠くことの出来ないものであるという観点に立って議論を続けて

来た。そして不完全ながらその理由を論じ、同時にラポール形成の条件を明かにしてきたわけである。しかし繰り返して述べたように、社会調査の究極の目標は正確なデータあるいは妥当性ある結果の獲得にあるのであり、ラポール形成それ自体にあるのではない以上、われわれはここに最初に提出されながらなお残された問題、即ちラポールと結果の妥当性との問題にかえらなければならない。

さて、ラポール大なればなる程、結果の妥当性は増大するものであろうか。この質問に対しては、われわれはむしろ肯定的回答をあたえてきたのであった。しかしながら、始めにも少しふれたように、ラポール賞揚の大勢の中に、それは全く異った意見も存在しているのである。この問題の討議は、かくて、この点から始めることが出来るであろう。

まず S. M. Miller は、不十分なラポールのみでなく、余りにも過多なラポールもまた、調査の続行に支障を来すという注目すべき報告を寄せている。彼はある地方組合におけるリーダーシップの研究において、その組合指導者たちと非常に親密になって行つた。多くのパーソナルなことがらが友人対友人の関係において語られ、その結果彼は、でなければ得られない多くの情報を獲得することが出来たのであった。この点ではすべてが好都合だったのである。しかし彼はその親密な関係そのものの故に、かえって、追求を要する質問をばからなければならぬ立場におちこんでいることに気付いたのであった。彼は云う「親密なラポールを保持しながら、組合指導者に反対しているように思える調査の途を追求することは不可能」であり、だからと云って、今となつては、かかる関係から身をひき「より低いレベルのラポールに移ることは、かかる変化がかなりの距離と不信を導く故に困難」であったのである。⁽¹⁾ 過多なラポール、彼の云う“over-rapport”が調査の進行を妨げたこの事例は、調査者の役割または立場ということからすれば、調査者の役割が友人の役割に圧倒されてしまったことを意味し、参与の程度から云えば、没入し過ぎ、所謂 Whyte の云う“total immersion”⁽²⁾の誤りを犯し、有用なアウトサイダーの役割の放棄という失策を意味しているわけである。

過多なラポールは調査の続行を妨たげるばかりでなく、更に結果の妥当性に関しても、むしろそれを損うものである

ことが、入念なケース分析を通じて Hyman によって明かにされている。即ち、面接者と回答者との間にグループ・メンバーシップにおける著しい隔差がなく、回答者が進んで自分の務めを果そうとする、素晴らしいラポールが存する、かつての面接の理想的条件を備えたケースにおいて、彼の見究めたものは、ラポール過多の故に回答者の面接者への同一化が余りに大きく、その回答は面接者の感情に一致する方向に偏り、かくて妥当性の少い結果が得られるということなのであった。⁽³⁾これに反し、ラポールが欠除しているケースにおいても、妥当性ある結果が得られるという事実も、同じくこの研究において明かにされたことを付け加えておく必要があるであろう。⁽⁴⁾

さて、ラポールが調査の進行を妨げるだけでなく、調査の結果をも歪めるものであるという以上の事實は、どのように理解したらよいであろうか。ここでわれわれは、しばらくの間ラポールを焦点から除いて、正確なデータ乃至妥当な結果とは何であり、どのような状態の下で獲得されるものであるかという、そもそもの問題に立ちもどる必要がある。正確なデータの獲得——それは面接において、回答者が真実を即ち事実と一致した報告を行うこと、あるいは回答者に含まれるありのままのものがそのまま引き出されること、一口に云って自己表示が妨げなく行われることを意味している。かくて面接の基本ルールの問題は、実にこの点、回答者の自己表示を充分可能ならしめるといふ点をめぐって、これまで展開されてきたと云ってよいのである。

以前述べた Caplow はこれについて、面接のルールというものは面接者の中立性 (neutrality) を保持するか、回答者の自己表示 (self-expression) を容易にするかのいずれかにデザインされていると云う。⁽⁵⁾ここにいう中立性は、面接者がトピックや回答者に対して中立であることを意味する。しかしこの中立性にしても、たとえば、一般の社会的規準や面接者の保持する見解がいささかも回答者に投影されず、回答者がどのような意見を表明するにせよ、すべて平等に受け入れる態度を意味しており、結局 Dexter が指摘するように「それ自体のために中立性をうちたてること」でなく、⁽⁶⁾そこにおいて情報者が求められているものを報告する状況をつくること」なのである。また Benney & Hughes 等

は平等性を強調するが彼等の云う平等性も、本来差異を有する面接者と回答者の間に形式的にせよ平等性をうちたて、回答者がかわりがちな不平等性と、その認識に基づく面接者の考えであろうところのものに、回答者が一致しようとする傾向をうち破り、結局回答者の自己表示を妨げなくせよという意味を含むものである。⁽⁷⁾このようにして中立性と公平性とかいうものも、回答者の自己表示を容易ならしめるという一つの事がらに集約されるようである。即ち面接を自己表示が充分可能な会話とすることが究極の目標ということになるであろう。かくて、その極致においては、面接者は、直接的あるいは指示的に、会話をリードすることによって回答者の前に立ちほだからない。Caplowの次の陳述は、この情景を見事に描写している。「一般に、面接者によって云われたり為されたりするのが少なければ少い程、ますます面接は効果的なものとなり、」かくして、「情報の収穫が最大限に達する場合は、回答者によって知覚される面接者は、彼の如何なる特徴も通常のアイデンティフィケーションをどめしめない。面接者は対象者の表現を写す一種の「言葉の鏡」(verbal mirror)のようである。上手に面接された人は、往々にして、その面接者を記憶したり記述することは出来ない。ある意味において、回答者は自分自身に面接していると云えるかも知れない。それは、「面接者は彼の特徴を、その会話中、回答者によってとり囲まれてしまっているからである。」

さて、問題を再びラポールに戻そう。ここに面接において自己表示を充分ならしめることが目標であるとすれば、ラポールはそのこととどのように関連するのであるか。われわれがラポールをめぐって論じてきたほとんど全域にわたって、ラポールは回答者の自己表示を開発するためのものであり、正確な結果に寄与するはずのものであるという仮定を含んでいたと云える。明かに、前述の Miller や Hyman の場合は全くそれを覆すかに見える。しかし、そのいずれの場合もラポール過剰という特殊な事態が注目されることに気付かなければならない。即ち、前者の場合は対象者と親密になり過ぎることによって面接者が窮地に追いこまれ、後者では、回答者が面接者との友好関係を維持しようとするところから、面接者に好感を与えるような応答に引きこまれ、結局、自らに存するありのままのもの、即ち自己表示は

抑止されたと言ふことが出来る。端的に云えば、このいずれの場合も、正確なデータの獲得という第一の目標に、その手段として隷属されるべきはずのラポールが、そのところを失っているということが指摘されるのである。

かくて、ラポールは有用ではあるが野放しのラポールはかえって有害としなければならぬ。ラポールもまた目的に對する手段として、正しく位置づけられ適切にコントロールされなければならぬわけである。前述の Miller はかえって妨げとなる“over- rapport”の発展に陥らないために、「対象者との親密さはどういう点において調査役割を制約するか」を自問し、単にラポールを發展すればよいというのでなく、どんな種類と性質のラポールが望ましいかを考慮することこそ肝要だと云う。⁽⁹⁾一方、Hyman は、「ある程度のラポールは明かに必要ではあるが、しかしラポールの型や次元についての、またソシアビリティの願わしい型についての明瞭化が必要である」と云い、更に精緻な分析を遂げようとする。彼はラポールを面接情況における回答者のまきこみ (respondent involvement) と解し、そのまきこみに二つの重要な構成要素、即ち課せられた仕事へのまきこみ (task involvement) と、社会的乃至人間関係的なまきこみ (social involvement) とを区分する。前者は、たとえば質問と回答へのまきこみであり、これに對して後者は、回答者のパースナリティとしての面接者へのまきこみを意味する。ところで彼の主張点は、ラポールとは、この二つの構成要素からなる“total involvement”の程度の函数であらうが、妥当性はこの total involvement よりもむしろ task involvement によって増大し、これに反して、回答者が社会的にまきこまればまきこまれる程、その結果にはある偏りが生じやすいということである。即ち、そのようにして得られた回答は、質問に對する回答というよりも、第一に回答者と面接者との間の人間関係的情況に對する応答であり得るからである。⁽¹¹⁾かくて彼によれば、まきこみの程度ではなく、その性質こそ重要なのである。即ち、“real task involvement”こそ調査者のひたすらの目標とするところではなければならない。ただ social involvement はそれを助ける限りにおいてのみ有用なのであって、後者が過剰になるとき、

前者は圧倒されてしまうわけである。この場合、ラポールは弊害こそあれ益なきものであり、重ねて云うように、後者

は決して前者に優先されてはならないものである。

しかしこのことは、いささかもラポールの重要性を無視するものではない。観察者と被観察者との間に介在するさまざまな社会的、精神的な距離は、何らかの形で克服されるのでなければ、調査は事実上不可能である。究極的には被観察者の協力を示すラポールは、この意味で不可欠のものと考えてよいし、またもしそれが正しく方向づけられるならば、正確なデータの獲得に対しても他の何よりも貢献するはずのものである。問題は正確なデータの獲得に有効なラポールをうちたてることなのである。

さて、調査の結果にさまざまな歪を来す一切の要因に、回答者は何の責任も負わないであろう。面接者を *task* にオリニントし、ひいては回答者をも第一義的に *task* にオリエントし——これこそが何よりも重要なのだが——調査という大目標にその相互作用を位置づけるのは、ひとえに調査者あるいは面接者の任務である。即ち、すべては面接者の訓練にかかっており、究極的には、面接の技術の問題としなければならぬ。しかしわれわれは、数ある面接の技術や規則についての個々の詳細については触れることが出来なかつた。われわれの関心は、単に社会的相互作用としての面接、ことに面接者と回答者との立場の分析に限られていたからである。そしてこの限定された問題についてすら、われわれの為し得たことは、そのほんの一部分に過ぎないかも知れない⁽²⁾。にもかかわらず、これは面接の技術が刻明に検討される場合、見逃がすことの出来ない重要な基本的側面としてとどまるはずのものである。面接の技術の問題も、調査という独自の状況の下に展開される面接者と回答者との相互作用の理解と、ことに回答者の側の立場や要求の入念な検討の上のみ、正しくうちたてられるべきものであることは疑いないからである。

- (1) S. M. Miller, "The Participant Observer and Over-Rapport" in "American Sociological Review" 1952, Feb., pp. 97-99.
- (2) Whyte, "Observational Field-Work Methods" in "Research Methods in Social Relations" part-two, P. 497.
- (3) Hyman, op. cit., pp. 46-52.

観察者と被観察者との間

- (4) *ibid.*, pp. 37-46.
- (5) Caplow, *op. cit.*, p. 165.
- (6) Dexter, *op. cit.*, p. 156.
- (7) Benney & Hughes *op. cit.*, p. 141.
- (8) Caplow, *op. cit.*, p. 170.
- (9) Miller, *op. cit.*, p. 98.
- (10) Hyman *op. cit.*, p. 52.
- (11) *ibid.*, p. 138.
- (12) *ibid.*, p. 48.
- (13) とりあげられた問題が文化によって大いに相違する会話の様式に関するものでありながら、全く他国のデータに頼って議論が進められたことも、この小論の限界の一つに数えられよう。それがどの程度わが国の場合に当はまるかは改めて研究を必要とするが、ここに示された観察者と被観察者との関係の基本構造は、少くとも大ざっぱには、適用出来るものと考えられるし、また、社会調査に関する限り、この種の問題の重要性ということについては、時と処とによって決して異なるものではないことは断言出来るのである。